

国際協力

JICA 駒ヶ根

マラウイ訪問の経験を教育現場に生かす ～教師海外研修に参加して～

「教師海外研修」とは、JICAが国際理解教育および開発教育に興味のある学校の先生を対象に10日間ほど開発途上国で研修をおこなうプログラムです。このプログラムに参加した経験を実際に活用している例を今回紹介します。

おおさわ しょうじ
大町北小学校 大沢 昇治 さん



▲マラウイの高校で模擬授業を行う大沢さん

平成18年度、最貧国の一つといわれているアフリカのマラウイ共和国へ訪問する機会をいただいた。この研修プログラムには、愛知、三重、静岡、岐阜、長野の5県から10名の教員が参加した。

プログラムの一つとして、2人1組の5チームで、誰でも授業等で気軽に使える教材づくりを行った。私たちのチームは、『マラウイと日本の同一性と多様性』をテーマとし、マラウイの小中高校生とホームステイ先の家族に対してアンケート調査を行った。現地の学校では、「将来の夢」と「ほしい物」について、ホームステイ先では、「1日のライフサイクル」と他にいくつかの質問をした。

それらの結果を持ち帰り、参加型学習で、日本の学校の子どもとともに、自分のたちの結果と比べ、双方の思いや願いの違い、変わらないものについて話し合った。「将来の夢」の比較からは、マラウイの子どもたちは生活に密着した夢が多く、それに向かって一生懸命生きていること、「ほしい物」の比較からは、日本人は物に恵まれすぎ、家族との触れ合いなどの大切なものを忘れてきていることに気づいた。

また、他の4つのチームの教材や収集した写真・資料をお互いに共有し活用し合うことで、マラウイというひとつの窓口を通して、子どもたちは、開発途上国への理解が深まり、身近な問題としてより広い視野からものごとを考えることができるようになった。

今後も、この研修で学んだことを生かして、参加型の楽しい開発教育・国際理解教育を続けていきたいと思う。マラウイで出会ったたくさんの子どもの笑顔の思い浮かべながら…

TOPICS

特集

JICA駒ヶ根の開発教育支援

教師海外研修に参加して	P1
教員セミナー大好評!	P2
ニカラグア発日本の子どもたちへ	P2
JICA国際協力出前講座	P3
訓練所の1日	P3
エッセイコンテスト2007結果発表	P4
元気にやっとなるけ?	P4
青年研修事業	P5
お国自慢レシビ	P5
長野県出身ボランティア奮闘レポートリレー	P6
出発コメント	P7
訓練所こぼれ話	P7
お知らせ	P8

駒ヶ根訓練所(JICA駒ヶ根)の地域連携事業

訓練所は、JICAボランティア派遣前訓練・研修の他に、県や自治体・学校等と連携した開発教育・国際理解教育の実践支援についても、随時ご相談を受付けております。



▲「マラウイでは家族との時間を大切にしている」ということに気づいた子どもたち

長野県教員等ネットワークによる 教員セミナー大好評！

県内各地から、国際理解教育に取り組まれている小学校から大学までの先生方や、先生を目指している方々が集まりました。義務教育課長を始めとする県教育委員会からも参加いただきました。

今年は現職参加教員の帰国報告やモデル授業の他に、JICAボランティア理解促進調査団として、ニカラグアに視察に行かれた長野県教育委員会の3名の先生方にも、終日に渡りご参加頂き、報告をしていただきました。日本とは全く違うニカラグアの教育事情や協力隊員の活動姿に驚きと感動の連続だったそうです。

また帰国報告をされた先生方からは、「協力隊の経験は自分の体験として、子供達に海外のことを話せる強みがある。」「自分自身も感じた『国際理解』とはまず日本の事を知り、そして違いを受け入れること」「協力隊への参加により、様々な分野の人と知り合っ、人脈が広がったことも活かし、これからも国際理解教育を進めて行きたい。」と発表がありました。

中山晴美先生（小諸市立美南ガ丘小学校／平成14年度1次隊・カンボジア・体育）からは、国際理解教育の実践報告（モデル授業）がありました。中山先生のクラスでは、今年は子供達が自ら興味を持った「アフリカ」についての学習を進めてきました。日本では見かけない「調理用バナナ」との出会いをきっかけとして、子供達が興味を持った分野ごとにグループを作り、いろいろと調べては、それを模造紙に書いて教室に貼り、みんなに伝えられるようにしています。そして今度はアフリカの音楽を実際に体験しようと、ジャンベ（西アフリカの太鼓）やダンスにも、積極的に取り組んでいます。

「何でも知りたい!」という純粋な探究心こそ、国際理解教育・開発教育に欠かせない教材の一つだと、再認識した実践報告でした。



▲クメール語（カンボジアの言語）の文字の意味を教える中山晴美教諭（小諸市立美南ガ丘小学校）

ニカラグア発日本の子どもたちへ ～海の向こうに暮らす清水先生より～

清水さんは、長野県の小学校教員で、現職で派遣されました。現在はニカラグアの子どもたちのために奮闘する毎日ですが、同時に日本の子どもへの思いも強く、二つの国の子どもたちを結ぶための活動もされています。

しみず としひろ
清水 理博 さん（ニカラグア・小学校教諭・下伊那郡高森町出身）

私が生活しているのは、「ニカラグア」。国内でも場所によって気候は様々ですが、基本的に四季は無く、乾期と雨期からなっています。雨期にはある一定の時間に日本の夕立のような激しい雨が降ることがあり、また乾期には



▲独立記念日に行われた、鼓笛隊の演奏に参加したときの様子（中央が清水さん）

かいた汗まで乾いてしまうくらいの暑さを感じる日があります。そんなニカラグアでの生活で感じた事をいくつかお話しします。

まず、水と電気の大切さ。想像してみてください。水の無いお風呂、水の無いトイレ、水の無い洗濯、そして何よりのどの湯き。そして電気の無い、真っ暗な夜はなんとも不便なものです。「無い」生活を体験してみて、初めて「水」「電気」の大切さを実感できた気がします。

でも、だからといってニカラグアの人々が、日本の人々より不幸だとは思いません。幸せとは何か、不幸とは何か。日本にいたときの開発途上国と呼ばれる国々に対するイメージは「貧しい」、「不幸」。確かに日本に比べ、物の数は少ないかもしれませんが、道具も少ないかもしれません。最低限の生活保障など、改善して

いかななくてはならないことがあるのも事実。それでも、幸せそうで、かっこよく、素敵な姿を見ることも日々たくさんあります。もし私たちが、例えばニカラグアの人々を不幸だと決め付けるのなら、それは大きな間違いだと思います。

外の世界に出てみて、人の優しさと共に、人に冷たくされる経験もしました。どうか皆さん、外へ目を向けると同時に、自分の周りの人への愛情も忘れないでいてください。そして、これからたくさんの知識を吸収し、たくさんの経験をしてみてください。

*これは、清水さんから日本の子どもたちへのメッセージです。学校で、家庭でぜひ子どもたちに読んであげてください。

清水さんは、長野県の所属中学校から預かったボールをニカラグアの学校に贈り、今年は体育の授業でそのボールを使うそうです。また2007年11月には、長野県教育委員会の先生方がニカラグアを訪問され、そのときの様子を上掲の「教員等ネットワークセミナー」にて報告されています。

「JICA国際協力 出前講座」 みなさんは知っていますか？

「出前講座」は、国際協力現場で活動経験のある人材を、講師として派遣するプログラムです。学校現場で、あるいは市民の集いなどで、国際理解や国際協力の学びに一工夫を加えたいときに、ぜひ活用してください。

平成19年度では、青年海外協力隊などの帰国ボランティアを中心に、多くの途上国での活動経験者が、多彩な体験に裏打ちされた面白い話、心を動かされた感動の話、国際協力の意義などを出前でお届けしました。出前先は、学校や自治体、市民の集いなどです。ここで、昨年度の様子をお知らせしましょう。

お届けした内容は・・・

- ・ JICA 事業ってどんなことしているの？
 - ・ JICA ボランティアの活動体験談を聞いてみよう！
 - ・ 途上国の人々と暮らしてどんな様子？
 - ・ いろいろな国の遊びをやってみよう！
 - ・ いろいろな国のお料理を作ってみよう！
 - ・ ゲームをとおして世界のことを考えてみよう！
- などなど

受講者の感想集

- ☆元隊員のみなさんを通してマダガスカル、フィジー、ニカラグアという国を好きになることができた。またゲームを通して、南北格差を感じとり、自然に国際協力の方向に子どもたちの意識を向けていたと思う。(小学校教員)
- ☆保護者も一緒に参加したが「書いたものを読むより、体験をとおして、より分かりやすく世界の現状を学び、幸せについて考えることができた」という感想が届いた。(小学校教員)
- ☆講師の方はペルーへ行き、任期を延長してまで野球を教えたということは、その活動が楽しかったからだと思うし、そのことに対する情熱はすごいものだったと思う。僕もこのように打ち込めて、さらにできれば人のためになることを見つけたいと思う。(高校生)
- ☆若者・シニアの人たちが「人づくり・国づくり」を目標に、海外で一所懸命に頑張っていることに感動した。(自治体主催の会)
- ☆スライドの中にクイズを取り入れ、工夫がすばらしいと思った。(地域の子育て支援グループ)
- ☆講座の中で一番良かったのは、ガーナでの体験をとおして、日本の生活文化を見直している点。日本の生活の方が便利だという感想の後で、でも本当に心が豊かなのはガーナの方ではないだろうかという、今の日本文化への警鐘が心を打った。(市主催の国際市民講座)



▲小学生に写真教材を使って開発途上国の理解を深めてもらいました



▲バングラデシュのカレーを帰国隊員と一緒に作り、バングラデシュの食文化について学びました

出前講座がたくさんの方にご活用いただけることを願っています。お気軽にJICA 駒ヶ根（駒ヶ根青年海外協力隊訓練所）出前講座担当までご相談下さい。

なお、JICA ボランティア経験者を派遣する場合、原則として講師に対し、交通費と謝金の支給をお願いしています。

「訓練所の一日」No.14 ～学校交流～

今日の午後は候補者が地元の小中学校、高校へ出かけていく「学校交流」の日でした。参加した候補者はこの日のために前から学校の担任の先生と打合せをして、どうやったら外国のことや海外ボランティアのこと、自分たちの熱い思いを伝えられるか、準備をしてきました。一方、子供たちも、来てくれる候補者の派遣国のことを調べたり、ゲームや歌を用意したりしてこの日を楽しみにしていました。その甲斐あって候補者はみんな「子供たちに元気をもらった！」と感激し、目を輝かせて帰ってきました。



▲子どもたちに派遣国の話をするシニア海外ボランティア候補者（右）

JICA中学生・高校生国際協力 エッセイコンテスト2007結果発表

本コンテストは、開発途上国の現状と国際協力の必要性について理解を深め、国際社会の中で日本は何をすべきか、また、自分たちひとりひとりがどう行動すべきかについて考えてもらうことを目的としています。



▲学校賞を受賞した飯田市立旭ヶ丘中学校

夏期に募集したエッセイコンテストは、全国的に応募数が増加し、長野県では中学生が昨年度に比べて386増の1041作品、高校生は60増の693作品となりました。対人口比の応募では全国でも上位にあり、国際協力・国際理解への意識の高さが窺えます。

国内機関長賞に選ばれた、信大附属長野中3年のマキナリー桜さんは、「世界と共存するということ」と題した作品でカナダでの滞在経験で感じたことについて触れ、「相互の文化を尊重し、認め合うことで平和な世界になってほしい」と述べられています。「いわゆるハーフを自分ではダブルと言いたい」という言葉が印象的な作品でした。

また、受賞者の一人、上伊那農高3年生の小林慧さんは中学生時代に取り組んだ「落穂拾い」を回想し、友人の「今、私にできることをしているだけ」という言葉を聞いて、自問自答し、「面倒くさい作業」を、充実した「大きな幸せにつながる小さな作業」として実践できた経験を記しました。

他にもご紹介したい作品が目白押しです。上位入賞者の作品はJICAホームページ、長野県関連の作品は駒ヶ根訓練所のホームページに掲載致しますので、是非ご一読頂き、ご感想等を駒ヶ根訓練所宛お送り下さい。

なお、次回、エッセイコンテスト2008も夏期に実施予定です。中高校生の皆さん、奮ってご応募下さい。

エッセイコンテスト2007 長野県受賞者・受賞校一覧

〈中学生の部〉 学校賞：中学校組合立小海中学校、小諸市立小諸東中学校、筑北村立聖南中学校、信州大学教育学部附属松本中学校、安曇野市立三郷中学校、池田町立高瀬中学校、伊那市立伊那中学校、飯田市立旭ヶ丘中学校

個人賞名	氏名	性別	学年	タイトル	学校名
国内機関長賞	マキナリー桜	女	3年	世界と共存するということ	信州大学教育学部附属松本中学校
入選	太田 有紀	女	3年	ごはんつぶのような平和	信州大学教育学部附属長野中学校
//	林 めぐみ	女	3年	国際協力の芽	信州大学教育学部附属長野中学校
//	湯澤 滯	女	3年	私ができること	伊那市立西箕輪中学校
青年海外協力協会会長賞	酒井 裕美	女	3年	「国際協力」を通して感じたこと	飯島町立飯島中学校

〈高校生の部〉 特別学校長賞：長野県上伊那農業高等学校
学校賞：長野県下伊那農業高等学校、長野県赤穂高等学校、長野県飯田風越高等学校

個人賞名	氏名	性別	学年	タイトル	学校名
入選	小林 慧	女	1年	塵も積もれば山となる	長野県上伊那農業高等学校
//	神津 希帆	女	1年	私ができること	長野県長野西高等学校
//	池上 千暁	男	1年	世界のために自分ができること	長野県赤穂高等学校
青年海外協力協会会長賞	宮下 智絵	女	1年	中国での生活	長野県赤穂高等学校

*学校名・学年は受賞時のものです

元気に やっとなるけ?

所外活動先より 隊員へのメッセージ



▲子どもたちと一緒に絵かきを楽しむ青年海外協力隊員候補者

駒ヶ根市の桜ヶ丘保育園は16年前に新園舎へ移転して以来ずっと所外活動を受け入れて下さっています。開放的な遊びの場は時には素敵な舞台になり、子供たちが奏でるハンドベルに候補者もつい聞き入ってしまうことがしばしばです。

さくらがおかほいくえん 桜ヶ丘保育園

「健康でいきいきと遊び、情緒豊かな子供に成長して欲しい」と願いながら日々子供たちを保育している桜ヶ丘保育園の保育士さんたちは、この所外活動も「子供たちが様々なことに興味や関心を持つきっかけになれば」と歓迎していただいています。候補者が世界地図を見せながら「ここがみんなのいる日本、お兄さんはこんなに遠くに行くんだよ」と話すと、子供たちも子供なりに世界を感じているのだそうです。保育士さんたちは候補者にとっても有意義な時間であるように心掛けています。「候補者が持っている特技や技術をこの場で活かし、派遣先での活動に役立ててもらえれば」とアドバイスをいただきました。「派遣先では期待されることがたくさんあり、ご苦労されることもあるとは思いますが、体に気をつけて頑張ってください」とのエールを送っています。

「アリガトウ、信州の優しき人たち」 ～青年研修事業

日本の各地域で生きる人びとが、様々な経験を重ね努力してきた姿は、それ自体が生きた教科書と言えます。JICAの「青年研修事業」とは、そのような地域の経験を、将来の国づくり、地域づくりを担う途上国の青年たちに知ってもらうためのプログラムです。

19年度の本プログラム、県内では、社団法人駒ヶ根青年会議所と長野県世界青年友の会の二つの団体の皆さんが研修を担いました。

テーマにあわせ、「いつ来日してもらおうか?」「どこでどのように学んでもらおうか?」「講師は?」「教材は?」そして、「日本を、信州を、そして日本人を好きになってほしい」それを形にするために、それぞれ仕事や家庭を持ちながら、何度も相談を重ね準備してきました。日本の国際協力の中でも、地域の人たちが主役のユニークなものです。

まず11月8日から21日まで、インドネシアからの18人が、駒ヶ根市を中心にして「地域医療」を学びました。続いて11月16日から29日まで「基礎教育教員養成」をテーマにパキスタンからの15人が上田市にやってきました。『教育県』『日本でトップ水準の平均寿命』どちらも、我が長野県が誇れる姿です。しかし、私たち県民が感じている以上に、途上国の青年たちには凄いと映っていたようです。

日程中、長野県衛生部、長野県教育委員会をはじめ、大学、高校、小学校、病院、診療所など、多くの場所で学びました。冷え込みが続いた滞在中ですが、常に懸命学ぶ姿勢には、いつしか日本人の方々が心を打たれるようになっていました。

全ての研修を終えた日。たくさんの「アリガトウ」の声とともにバスに乗りこむ青年たちと、ともに過ごした日本人が、互いにちぎれんばかりに手を振って別れを惜しむ姿がありました。

最後に、青年たちが残した「日本の印象」の中から、その一部です。「素晴らしい自然」「道にゴミが落ちているのを一度も見ない」「とても平和」「時間厳守」「責任感」「愛すべき、親切で礼儀正しく実直な人々」…。ここに書き尽くせないほどの言葉が寄せられたことをご報告します。



▲パキスタン青年の見送りにかけつけた子どもたち



▲中沢小学校で生徒と交流するインドネシア青年

お国自慢レシピ

訓練所で語学を教えている先生から、出身国のとびっきりおいしいお料理をレシピ付でご紹介!日本人の口に合うように味付けが工夫されています。ぜひお試しあれ!

コロンビア料理

AJIACO (アヒアコ)



アヒアコは、特に週末によく食べられる料理です。簡単な料理ですが、一度にたくさんの量を作ったり、準備に時間がかかったりするため、週末やお祭りの時に作られることが多いです。鶏肉とじゃがいもの素材の味が楽しめるスープです。

—作り方—

1. じゃがいもの皮をむいて4等分にする。クリオージャは皮をむくだけ。
2. 鍋にたっぷりの水を入れ、鶏肉・じゃがいも・長ネギ・にんにく・塩・こしょうを入れて沸騰させ、30分ほど煮込む。
クリオージャはすぐに柔らかく煮えるのでまだ入れない
3. 鶏肉を取り出し、とうもろこし(適当な長さで切っておく)とコリアンダー(と、クリオージャ)を加える。
*好みにより半分ほどの量のクリオージャをおろし金ですると、こってりととろみがついたスープに仕上がる
4. 鶏肉を千切り状態にさく。
5. とうもろこしが柔らかくなったら、4を加える。
6. 器に盛り、ケッパーと生クリームを好みで上にかかけ、アボガドを添えて、召し上がれ♪

アヒアコの材料

- じゃがいも …… 4~5個
- 鶏胸肉 …… 1/2羽分
- とうもろこし 1~1と1/2本
- 長ネギ …… 1/4本
- にんにく …… 1~2かけ
- コリアンダー (香菜)
- 塩・こしょう
- アボガド 1個
- ケッパー
- 生クリーム

しシピの主は
誰ぞら?

ハイメ・
マノサルバ講師



ハイメ講師が来日したのは1987年の10月、駒ヶ根訓練所では1988年9月からスペイン語を教えています。最初日本に来て、一番びっくりしたことは、日本人が「はい!」と端的に答える姿だそうです。ハイメ講師の生まれたコロンビアでは「Hola, amor(こんにちは、愛しい人)」などと通常の会話でも陽気に使うことが多く、日本人の「はい」という端的な返事は、少し冷淡のように感じたそうです。また、いつも時間に正確に行動する日本人にとっても驚いたようです。

すでに19年以上にわたって数多くの候補者を送りだしてきたハイメ講師。旅立つ教え子たちに「そのとき感じたことや思ったことをぜひことばにして伝えてほしいです。黙っていても誰も理解してくれないので、積極的に自分自身を表現してってください。」とメッセージを送ってくれました。

★スペイン語のプチ語学講座★

こんにちは → オラ お腹いっぱい → エストイ ジェノ
おいしい! → リコ! ありがとう → グラシアス

ボランティア 奮闘レポートリレー

report_36

スリランカ

野球 (小諸市)

青年海外協力隊

うるしばら しんや

漆原 伸也さん

スリランカ

面積：6万5,607 km² (北海道の約0.8倍)

人口：1,967万人 (2005年)

首都：スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ

住民：シンハラ人72.9%、タミル人18%、

スリランカ・ムーア人8%

言語：シンハラ語・タミル語 (公用語)、英語 (連結語)

宗教：仏教、ヒンドゥー教、イスラム教、ローマン・カトリック教

(外務省HP：各国・地域情勢より)

本レポートは、漆原さんが派遣前に勤務されていた高校の皆さんに向けたメッセージという形で書いていただきました。漆原さんが協力隊員になったことで、生徒の皆さんに与えた影響はかなり大きいそうです。

松川高校の皆さんお元気ですか。私がスリランカに赴任して現在11ヶ月目を迎えましたが、今では現地人に負けなくらい真っ黒に日焼けをしています。スリランカでの生活や活動にも慣れ、ここで心地よく過ごしています。

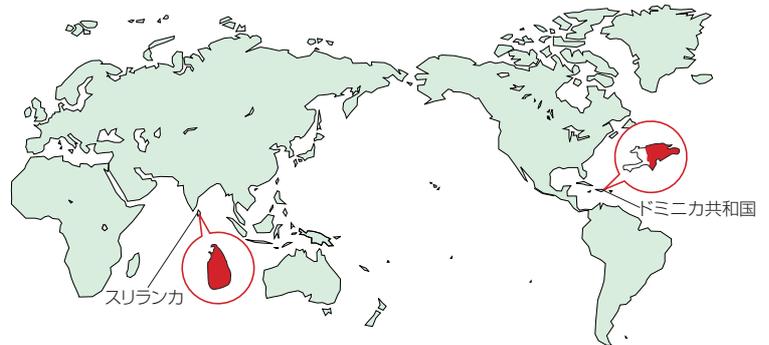
しかし、これまでの間、生活や活動においてびっくりすることを沢山経験しました。その中でも日本との大きな違いは内戦があるということです。今でも国内で戦闘やテロが起きます。状況によっては活動が休みになったり、移動禁止になることもあります。つい先日、悲劇が起きました。私の親友の野球コーチと7人の選手が自爆テロに巻き込まれ亡くなってしまったのです。かなりのショックと悲しみでした。この国では戦争やテロは決して他人事ではないのです。それを思い知らされた事件でした。しかし、そんな状況の中スリランカの人達は明るく精一杯生きています。

野球のレベルは日本に比べたらまだまだですが、野球を楽しむという点では日本に負けてはいません。そして、スリランカの野球選手達は本当に素晴らしい!! そんな彼らと野球ができることを誇りに思います。

誰にとっても目の前に広がる物一つ一つが新たな発見です。それは日本も変わりません。気付くか気付かないかは皆さん次第。皆さんにもこれから色々な世界を見て、そして色々な発見をしてもらいたい、そう思います。



▲国内大会の試合後の一枚



report_37

ドミニカ共和国

日本語教師 (下高井郡山ノ内町)

日系社会青年ボランティア

よしいけ さやか

吉池 沙夜香さん

ドミニカ共和国

面積：4万8,442 km² (九州に高知県を併せた広さ)

人口：960万人 (2006年、世銀)

首都：サント・ドミンゴ (人口約91.6万人)

住民：混血73%、ヨーロッパ系16%、アフリカ系11%

言語：スペイン語

宗教：カトリック

(外務省HP：各国・地域情勢より)

「ドミニカ共和国」・・・と聞いて浮かぶイメージは？

青い海、白い砂浜、灼熱の太陽、ラテンの陽気な人々でしょうか。

ドミニカ共和国ってどこにあるの？そんな方も多いかもかもしれませんね。

私は今、日本との時差-13時間、カリブ海に浮かぶこの国で、2006年6月より日系日本語学校教師として活動しています。私の任地の1つであるコンスタンサは標高1200mに位置し、夏でも冷涼な気候です。そして山々を望みながらの通勤路には畑が広がり、きれいな花々が咲き乱れています。赴任する前に思い描いていたドミニカ共和国のイメージとはずいぶん違いますが、故郷に似たこの景色が私の心を和ませてくれます。



▲七夕のときに子どもたちと

ドミニカ共和国は2006年に日本人移住50周年を迎えました。日本から移住してこられた1世の方もまだまだお元気で、たくさんの貴重なお話を日本語で聞かせてくださいます。一方私が日本語学校で教えている3世の子ども達の日常は、ほとんどがスペイン語です。子ども達にいかにも目標を持たせ、やる気を出させるか。悪戦苦闘の毎日です。

日常生活でも、たくさんの日系人、ドミニカ人に助けられ楽しく毎日を過ごしています。何かをしてもらったり、自分が誰かの役に立ったり・・・いろんなことを助け合いながら、人々の中で生きている自分を感じています。いつもいいことばかりではないけれど、そんな当たり前のようで、なかなか気付かない人々の温かさを感じながら、今日も私は活動しています。

行ってらっしゃい!! 長野県出身・新ボランティアのみなさん

長野県出身のボランティア計7名が3月下旬に、それぞれの任国へ出発しました。
(敬称略。かっこ内は派遣国名/職種/出身市町村)

【青年海外協力隊】



かみじま たかや
上島 誉也さん
(バングラデシュ/バスケットボール/伊那市)
自分がJICAボランティアに応募した理由としては「人のために何かをしたい、それが自身に返ってきて、変化や成長につながる」と思ったことが第1です。現地ではなるべく人と接して、より良い生活環境を作って充実生活を送りたい。職種はバスケットボール、何より楽しさを伝えたい。そして、その楽しさを伝えたいと思える現地の人材を作りたい、と思っています。



みやざわ くみこ
宮澤 久美子さん
(ブルキナファソ/青少年活動/諏訪郡下諏訪町)
子供のころから憧れていた青年海外協力隊に参加する夢がもうすぐ実現します。私が派遣される西アフリカのブルキナファソは、最貧国のひとつと言われていますが、国名の由来である「高潔な国」の通り、穏やかで優しい国民性だそうです。元気で帰国して皆さんに体験をお伝えします!



くぼた しほほ
久保田 志穂さん
(インドネシア/助産師/諏訪郡下諏訪町)
首都ジャカルタから東方向へ450kmのところにあるレンバン県保健衛生事務所で、栄養指導を中心に保健指導を行い、母子共に安全に過ごせるように支援します。現地の人と同じ目線に立って一緒に考え、対象に適した活動をしたいと思います。



もりなが ひとみ
森永 仁美さん
(エジプト/手工芸/安曇野市)
首都カイロでストリートチルドレンに、生活向上の一環として手工芸を教えに行きます。手工芸分野のみならず、料理など自分の持つ知識経験なども生かしてみようと思います。過酷な状況でも強く生きようとする人々の何かを日本の子供に伝えたいです。



こばやし まき
小林 真紀さん
(ニジェール/養護/松本市)
サハラ砂漠の下、首都にあるニアメろう学校に行きます。協力隊への参加は以前からの夢でした。自分の住む町や活動場所などで、どれだけ根を張ることができるのか、とても楽しみです。



ふじい みのり
藤井 美紀さん
(モンゴル/日本語教師/諏訪市)
任国ではウランバートル市内の小中学校を巡回しながら日本語の授業をしたり、モンゴル人の先生への勉強会をする予定です。故郷の諏訪より格段に寒い(-40℃!)モンゴルで、子どもたちと勉強できるのが楽しみです!!自由ののびのび、勉強することの楽しさを伝えられたらいいなと思っています。そしてやっぱり諏訪方言も教えてこようっと。

【シニア海外ボランティア】



おおた まさき
太田 優喜さん
(パキスタン/品質管理(金属部品加工)/茅野市)
今までに何かと話題の多いパキスタンへ、自動車部品の品質管理支援で赴任予定です。日本で貧しさから立ち上がった世代の一員として地に足をつけ、日本人のスピリットを伝えられたら幸いと考えています。

次回の訓練予定

平成20年度第1次隊 派遣前訓練

平成20年4月9日(水)～6月12日(木)

訓練所こぼれ話 No.6

かすや こういち
粕谷 甲一さん(駒ヶ根訓練所第2代目所長)

前号の「開かずの扉」エピソードを受けて、訓練所第2代目所長の粕谷甲一さんが記事を執筆してくださいました。協力隊のみならず、多くの場で協力活動を実践されている粕谷さんの言葉には非常に重みがあります。

駒ヶ根訓練所の三年の任期中の思い出話を書くのではなく、協力隊ですごした十余年のうち、84歳の今に至るまで、私を支えてくれているその原点について報告したい。その間、在日ベトナム難民、外人労働者や、ベトナム国内のホームレスの子供達、及び、山岳少数民族の他、西アフリカのシエラレオネの貧しい人々からも多くを学び、そこで、協力隊の心を更に深めることができた。

私は昨年の大晦日に、テレビで二つの対照的に画面に接した。第一は紅白歌合戦であり、第二は、ベートーベンの第九合唱曲であった。前者は、華麗な大舞台の上で展開される芸能人の華やかな姿に溢れ、それを前にして熱狂する群集も艶やかな姿をした人が大部分であった。それは却って、私に世界の貧しい国々人と日本国内の格差の惨めさに苦しむ人々を思い出させたのである。そして、この壮大な演出に伴う巨額な出費を何とか節約して、少しでも日本と世界の必要な人々に回すことは出来ないか等と批判的に眺めている自分に気が付いた。そこでふと思い出したことがあった。本紙の前号で訓練所初期に「あかずの扉」という事件があったとことが述べられている。それは、訓練棟が立派すぎるといので、私室と食堂の間の廊下に「あかずの扉」を作り、一度外にでて、冷気に接して遠回りして食堂に行くという段取りであった。それは長く持続しなかったが、一つの自己反省の例としてここに記した。

ところで、数日前、私は自分の不注意で転倒してより気分がすぐれず、フラフラしてきたので、しばらく外の冷気に当たってから、再び家に入り、テレビをつけたところ、そこでは、ベートーベンの第九を、100名を超える若い合唱団によって溢れるように歌っていた。彼等は簡素なユニホームを着た若い人々で、その顔は感動に高揚していた。一人の若い女性の音大生がその感動を次のように語った。「全ての人が、世界中で友となるという喜びを歌い、国籍も宗教も人種も言葉の差を越えて、兄弟になる歓喜の涙が溢れた。我等全ての人間には、どこかに指揮者があり、すべての人を愛に導くのだ」と。

この感動を協力隊の隊員は予感できるはずである。その思いをどんな時も大切に、それを自分の心の原点として、前進していけば、あの合唱のテーマが「喜びに寄せる」歌とあるように、この日本にも晴れ上がった喜びに満ちた朝がくるであろう。

APRIL

4月

9日(水)

平成20年度第1次隊派遣前訓練開始 (駒ヶ根訓練所)

11日(金) 13:00-14:50

公開講座「ボランティア事業の理念」(講師:大塚正明事務局長/青年海外協力隊事務局)

15日(火) 14:00-14:50

公開講座「JICA事業概要」(講師:今井史夫アフリカチーム長/青年海外協力隊事務局)

21日(月) 15:10-17:00

公開講座「国際関係と日本の国際協力」(講師:廣野良吉氏/成蹊大学名誉教授)

28日(月) 15:10-17:00

公開講座「技術と開発のかたち」(講師:中村尚司氏/龍谷大学経済学部教授)

4~5月

教師海外研修の参加者募集(5月下旬頃応募締切予定)

本年7-8月頃にブラジルまたはフィリピンでの研修にご参加いただけます。

詳細情報は4月以降JICA ホームページをご覧ください。

MAY

5月

3日(土) 15:10-17:00

公開講座「異文化の理解と適応」(講師:木村秀雄氏/東京大学大学院総合文化研究科教授)

中旬(土-日)

中学生体験入隊(駒ヶ根JC主催)(1泊2日)(駒ヶ根訓練所)

JUNE

6月

12日(木)

平成20年度1次隊派遣前訓練終了(駒ヶ根訓練所)

15日(日)

日系ブラジル人グループによる演劇上映(予定)(飯田市人形劇場)

6~9月

JICA国際協中学生・高校生エッセイコンテスト2008の作品募集(9月上旬頃応募締切予定)

詳細情報は6月以降JICA ホームページをご覧ください。

◆ 公開講座の聴講を希望される方は、2日前までに駒ヶ根青年海外協力隊訓練所・公開講座担当まで、ご連絡ください。
なお、講師の都合で日程が変更となる場合もありますことを予めご了承ください。

編集後記

早いもので、着任してもう一年。この間、発行目的を「地域に根を下ろす訓練所」の活動広報から、「長野県の国際協力推進」に大きく転換してきました。毎年削られる限られた予算の中で、これからも新体制で大奮闘。(シ)

お知らせ

一日体験入隊に参加しませんか?

5月10日(土) 9:30~17:00

JICAボランティアの春募集(4/8~5/23)に伴い、「一日体験入隊」を開催します。施設見学・応募時の健康に関するアドバイス・語学体験・報告書の閲覧・候補者との昼食懇親会など、盛り沢山のプログラムをご用意して、皆様のご参加をお待ちしています。お問合せは、駒ヶ根訓練所募集担当まで。

- 場所:駒ヶ根訓練所
- 定員:30名
- 申込締め切り:5月1日17:00 ただし、定員になり次第締め切ります

がんばれ!! 長野県出身JICAボランティア!

JICAボランティア派遣実績

平成20年1月31日現在

①青年海外協力隊員数	③日系社会青年ボランティア数
派遣中 56名(内女性35名)	派遣中 2名(内女性2名)
帰国 596名(内女性255名)	帰国 13名(内女性7名)
累計 652名(内女性290名)	累計 15名(内女性9名)
②シニア海外ボランティア数	④日系社会シニアボランティア数
派遣中 3名(内女性0名)	派遣中 0名(内女性0名)
帰国 27名(内女性5名)	帰国 2名(内女性0名)
累計 30名(内女性5名)	累計 2名(内女性0名)

派遣中JICAボランティア(平成20年1月31日現在)

